

検討の背景について

住宅火災の早期覚知方策のあり方に関する検討部会（第1回）

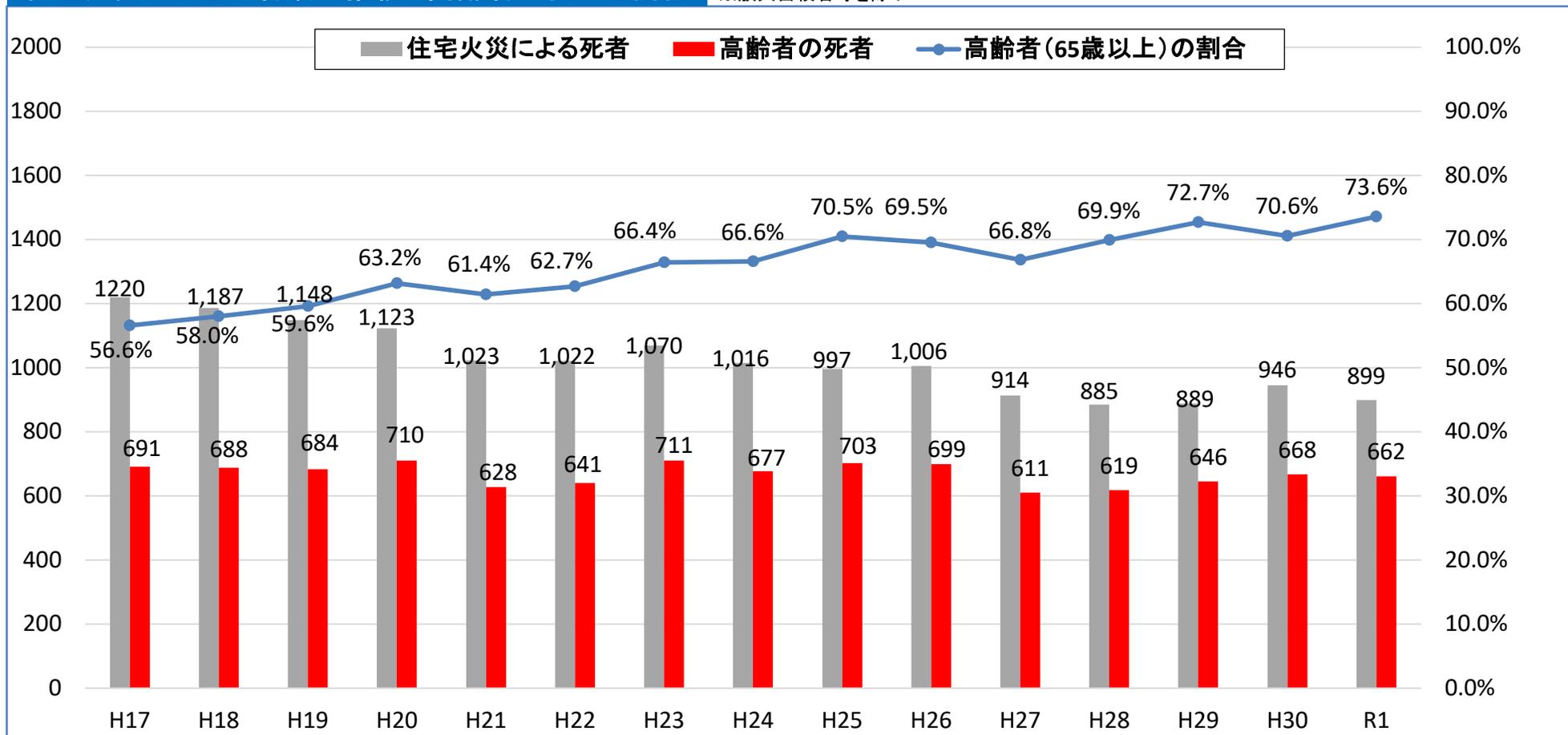
住宅火災による死者数の推移

令和元年中の住宅火災による死者数（放火自殺者等を除く。）は899人で、前年と比較すると概ね減少傾向となっているものの、依然として多い人数で推移している。

近年の住宅火災による年齢階層別死者（放火自殺者等を除く。）を見ると、**65歳以上の高齢者（以下「高齢者」という。）の占める割合が全体の約7割**と高水準で推移している状況であり、今後、さらなる高齢化の進展が見込まれる中で、住宅火災による高齢者の死者数の割合は増加していくことが予想される。

住宅火災による死者数の推移と高齢者の占める割合

※放火自殺者等を除く

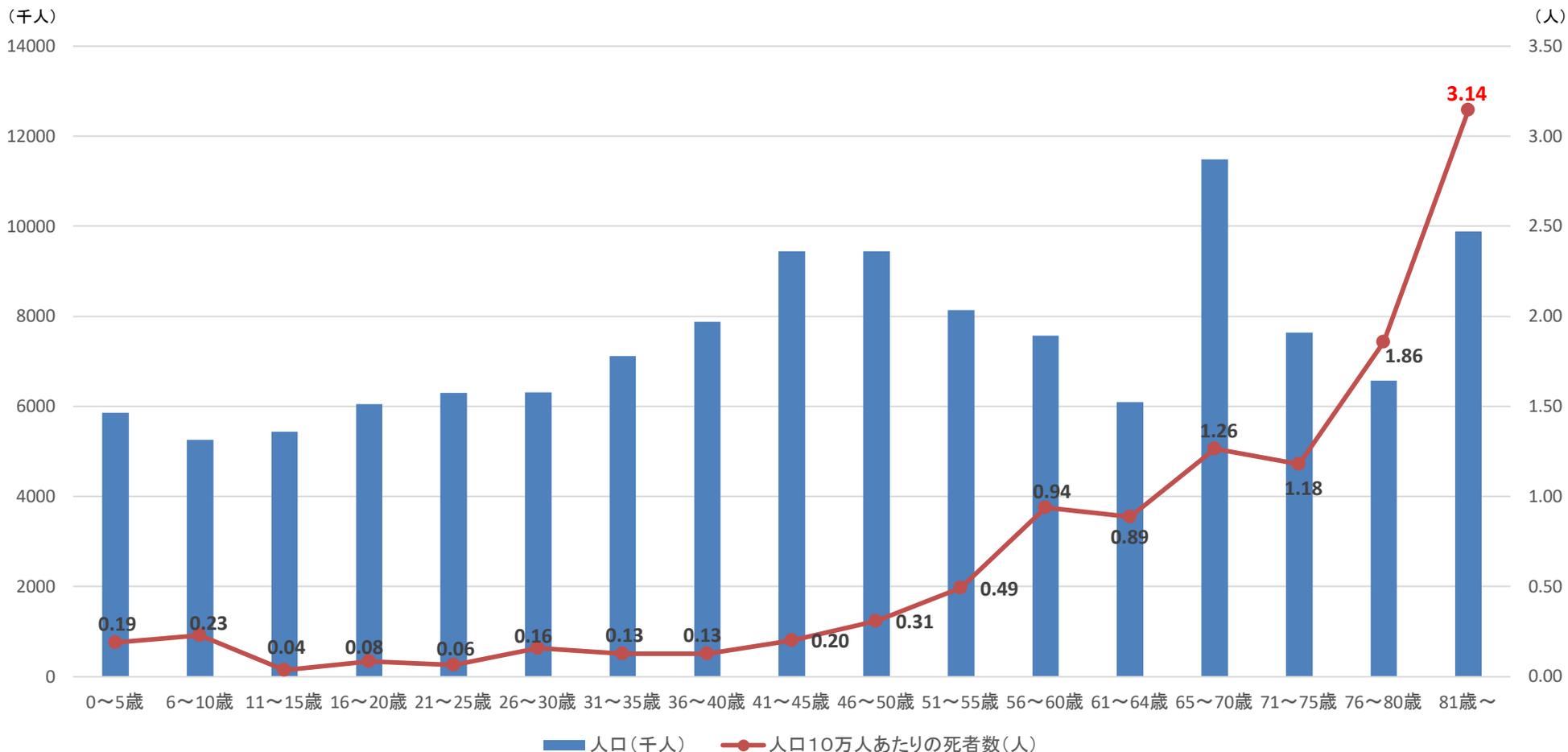


人口10万人あたりの死者数

年齢区分別の人口に対し、65歳以上の高齢者では人口10万人あたりの死者数が他の年齢層に比べ多い傾向にあり、特に81歳以上では3.14人で最も多い。

年齢区分別人口と人口10万人あたりの死者数

※平成30年(2018年)中の火災報告データから抽出・集計

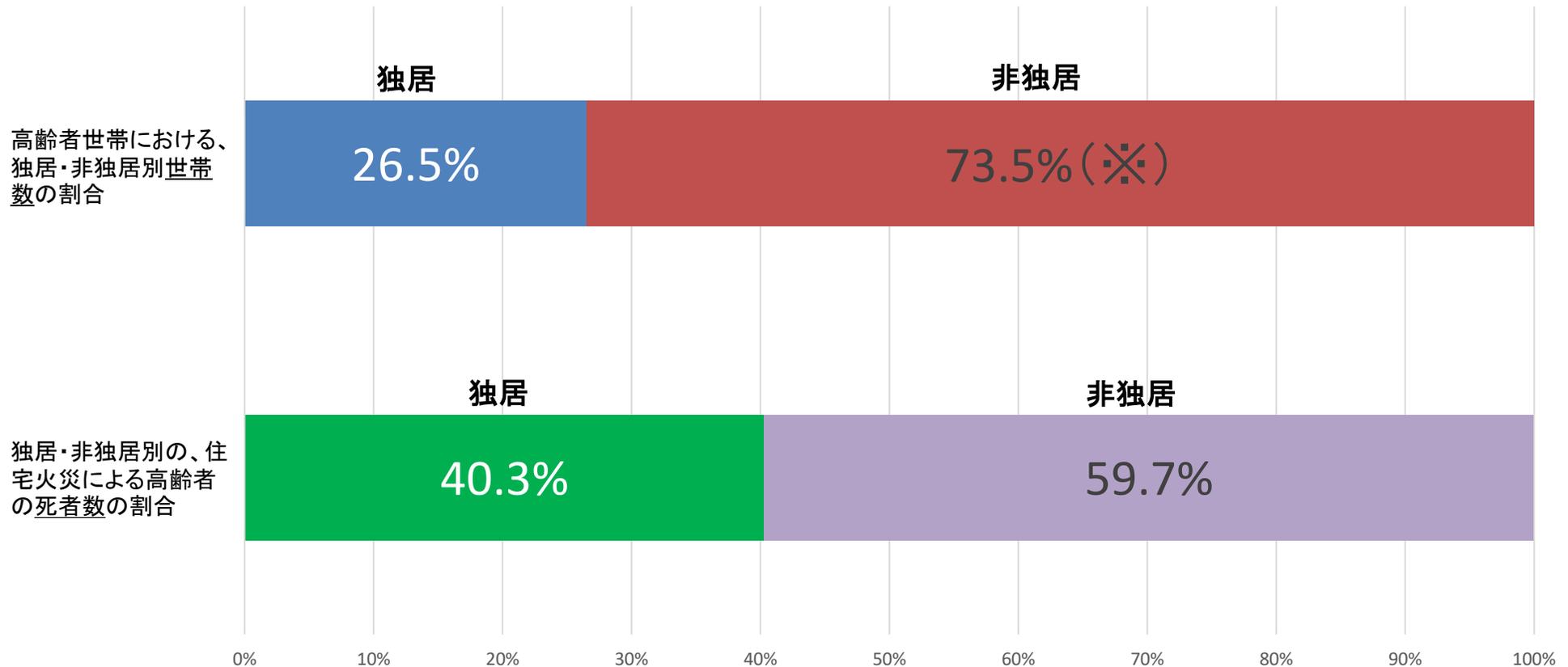


高齢者の世帯状況

高齢者の世帯構成比に比べ、高齢者の死者数比では、独居世帯が高くなっている。なお、非独居世帯(※)には高齢者のみの世帯と高齢者以外と居住する世帯が含まれるため、人数で比較した場合、独居の割合は更に少ないと想定される。

このため、**独居の高齢者が火災により死亡する可能性は、非独居の高齢者に比べて高い**と考えられる。

高齢者の世帯状況（独居・非独居）と、住宅火災による高齢者の死者の世帯状況



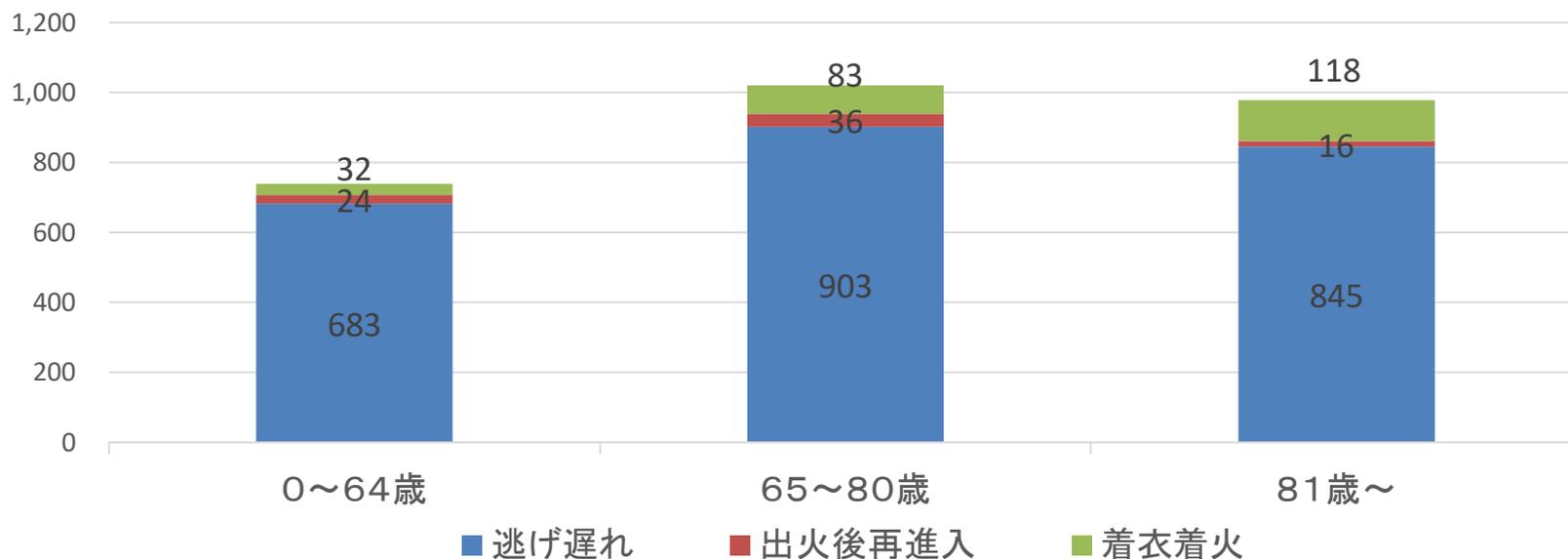
高齢者の世帯構成比については厚生労働省国民生活基礎調査より

住宅火災における死者の発生経過

住宅火災における死者の発生した経過別死者数・割合を見ると、「逃げ遅れによるもの」が各年代において80%を超え、最も多くの割合を占める。また、高齢になるにつれ着衣着火による割合は増加する傾向にある。

住宅火災における死者の発生した経過別死者数・割合

※平成26年(2014年)から平成30年(2018年)までの火災報告データから抽出・集計



経過別	0～64歳	65～80歳	81歳～
逃げ遅れによるもの	92.4%	88.4%	86.3%
出火後再進入したもの	3.2%	3.5%	1.6%
着衣着火によるもの	4.3%	8.1%	12.1%



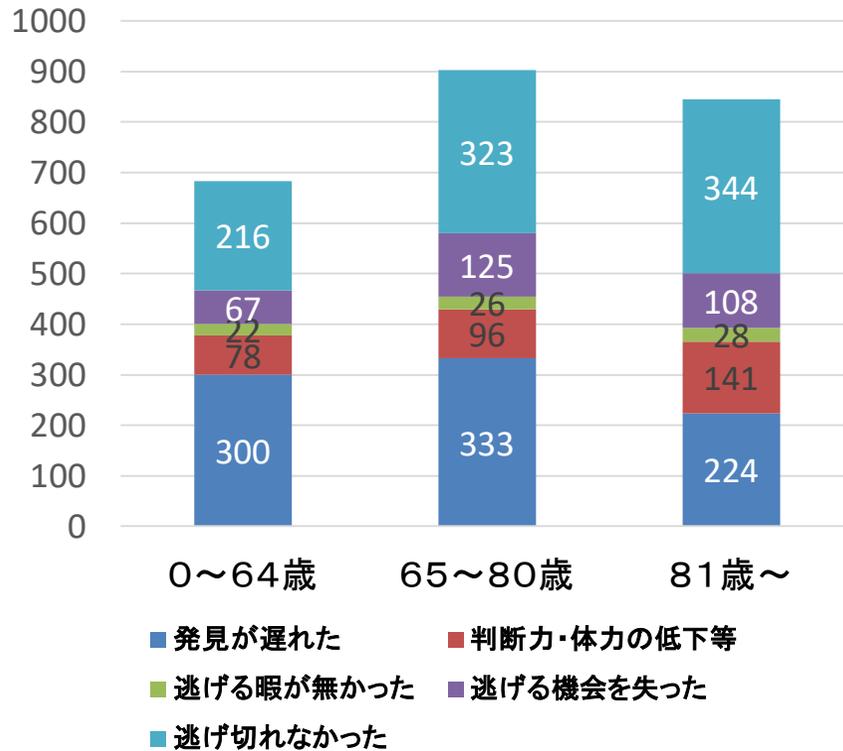
各世代で逃げ遅れによる死者が8割超

死者の発生経過

逃げ遅れの内訳では、0歳～64歳及び65歳～80歳の年代で「火災の発見が遅れた」が最も多い割合となっており、就寝中で発見が遅れたことが主な原因となっている。

また、81歳以上の年代で「逃げ切れなかった」が最も多い割合となっており、身体が不自由のために逃げ遅れたものや、延焼拡大が早く逃げ切れなかったものが主な原因となっている。

「逃げ遅れ」の理由(中分類)別件数・割合



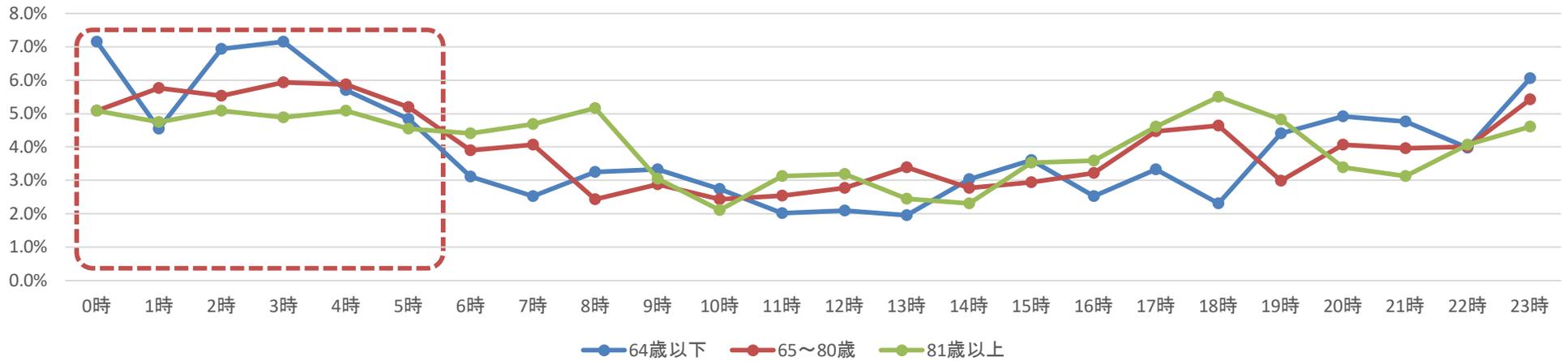
逃げ遅れの内訳	0～64歳	65～80歳	81歳～																								
火災の発見が遅れた (発見が遅れ、気づいた時は、火煙が回り、すでに逃げ道がなかったものと思われるもの(全く気づかなかった場合を含む))	43.9%	36.9%	26.5%																								
<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>0～64歳</th> <th>65～80歳</th> <th>81歳～</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>熟睡</td> <td>62.0%</td> <td>52.9%</td> <td>51.8%</td> </tr> <tr> <td>泥酔</td> <td>4.3%</td> <td>4.5%</td> <td>0.9%</td> </tr> <tr> <td>病気・身体不自由</td> <td>8.7%</td> <td>15.9%</td> <td>14.7%</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>25.0%</td> <td>26.7%</td> <td>32.6%</td> </tr> </tbody> </table>		0～64歳	65～80歳	81歳～	熟睡	62.0%	52.9%	51.8%	泥酔	4.3%	4.5%	0.9%	病気・身体不自由	8.7%	15.9%	14.7%	その他	25.0%	26.7%	32.6%							
	0～64歳	65～80歳	81歳～																								
熟睡	62.0%	52.9%	51.8%																								
泥酔	4.3%	4.5%	0.9%																								
病気・身体不自由	8.7%	15.9%	14.7%																								
その他	25.0%	26.7%	32.6%																								
判断力・体力の低下等 (判断力に欠け、あるいは体力的条件が悪く、ほとんど避難できなかったと思われるもの)	11.4%	10.6%	16.7%																								
逃げる暇が無かった (ガス爆発等延焼拡大が早かったため、ほとんど避難できなかったと思われるもの)	3.2%	2.9%	3.3%																								
逃げる機会を失った (逃げれば逃げられたが、逃げる機会を失ったと思われるもの)	9.8%	13.8%	12.8%																								
逃げ切れなかった (避難行動を起こしているが、逃げ切れなかったと思われるもの(一応自力避難したが、避難中火傷、ガス吸引し病院等で死亡した場合を含む))	31.6%	35.8%	40.7%																								
<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>0～64歳</th> <th>65～80歳</th> <th>81歳～</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>身体不自由のため</td> <td>16.2%</td> <td>36.2%</td> <td>38.4%</td> </tr> <tr> <td>延焼拡大が早く</td> <td>35.2%</td> <td>31.3%</td> <td>28.8%</td> </tr> <tr> <td>逃げ道を間違えて</td> <td>3.2%</td> <td>2.5%</td> <td>3.2%</td> </tr> <tr> <td>出入口施錠のため</td> <td>2.8%</td> <td>2.5%</td> <td>2.3%</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>42.6%</td> <td>27.6%</td> <td>27.3%</td> </tr> </tbody> </table>		0～64歳	65～80歳	81歳～	身体不自由のため	16.2%	36.2%	38.4%	延焼拡大が早く	35.2%	31.3%	28.8%	逃げ道を間違えて	3.2%	2.5%	3.2%	出入口施錠のため	2.8%	2.5%	2.3%	その他	42.6%	27.6%	27.3%			
	0～64歳	65～80歳	81歳～																								
身体不自由のため	16.2%	36.2%	38.4%																								
延焼拡大が早く	35.2%	31.3%	28.8%																								
逃げ道を間違えて	3.2%	2.5%	3.2%																								
出入口施錠のため	2.8%	2.5%	2.3%																								
その他	42.6%	27.6%	27.3%																								

出火時間帯の観点における検討課題

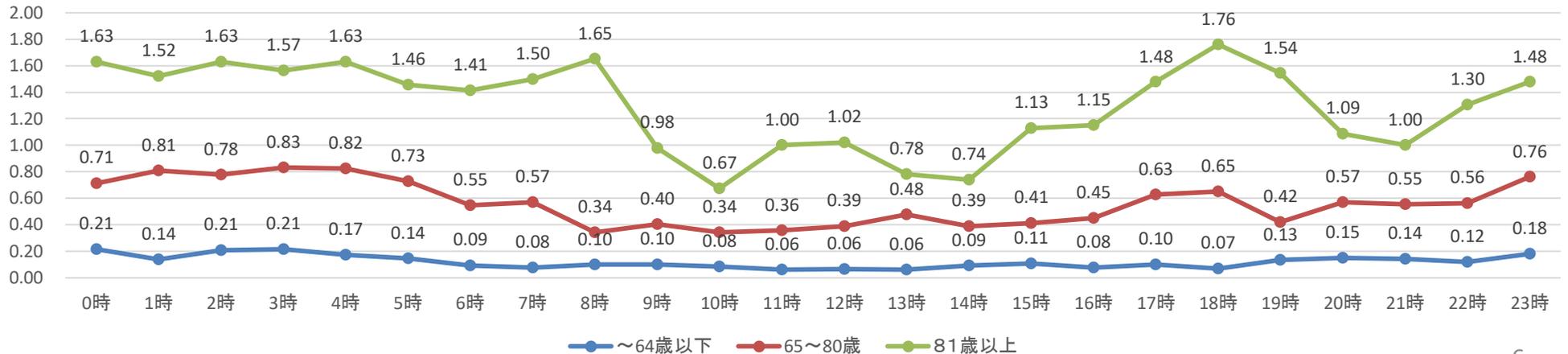
出火時間帯別死者数の割合（各年齢層別）を見ると、各世代において、0時から5時の深夜帯・早朝の死者発生率が高くなっている。

出火時間帯別死者数の人口比率では、高齢者の方がいずれの時間帯も死者数が高くなっている。

出火時間帯別死者数割合（各年齢層別）



出火時間帯別死者数人口比率

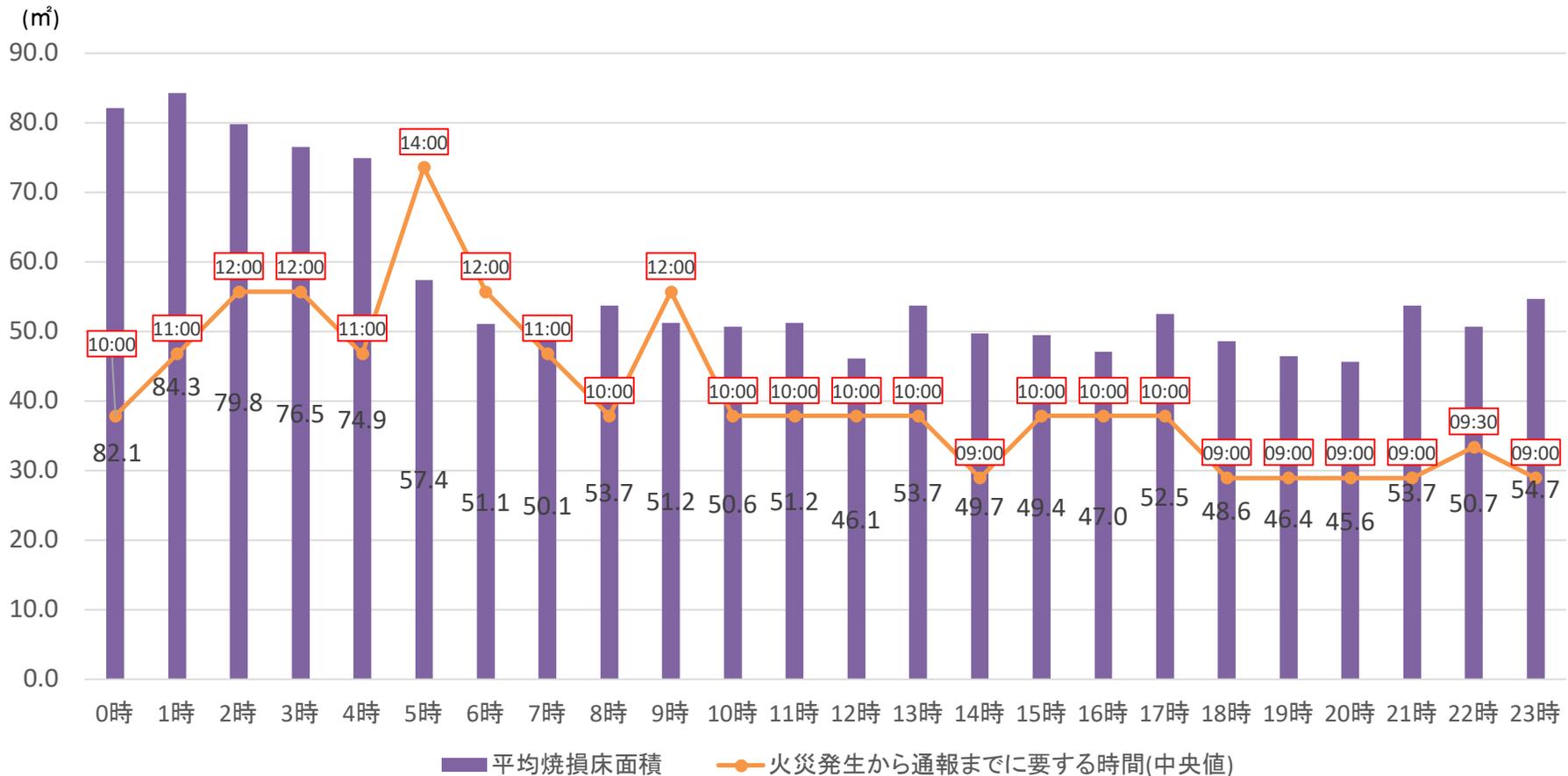


出火時間帯の観点における検討課題

一般住宅の出火時間帯別平均焼損床面積をみると、0時から4時の深夜帯・早朝の平均焼損床面積が特に大きくなっている。

また、火災発生から通報までに要する時間の中央値をみると、早朝の5時では14分と最も時間を要しており、全体的に1時から7時の深夜帯・朝方の時間帯の通報が遅れる傾向にある。

出火時間帯別平均焼損床面積・火災発生から通報までに要する時間（一般住宅）



火災発生から通報までに要する時間における検討課題

火災発生から通報までに要する時間ごとの一般住宅の出火件数を見ると、通報までに5分を要した火災が最も多く、それ以降は、通報までに要する時間が大きくなるとともに、件数は徐々に減少している。

死者の発生割合では、**2分及び3分で通報した火災が3%台**と少なくなっている。火災発生から通報までに要する時間が多くなるにつれ、死者発生割合も多くなる傾向にある。

火災発生から通報までに要する時間ごとの出火件数・死者発生割合（一般住宅）



住宅火災に傾向に対し、住宅火災による死者数の低減のため、それぞれ以下のような方策が必要であると考えられる。

住宅火災の傾向

住宅火災における死者の傾向

- ・ 65歳以上の高齢者の占める割合が高い水準であり、更なる高齢化の進展により、割合は増加していくことが見込まれる。
- ・ 高齢者の世帯状況では、独居の高齢者が火災により死亡する可能性が高い。

死者の発生経過について

- ・ 死者の発生経過では、逃げ遅れが全年代で80%を超えている。
- ・ 逃げ遅れの内訳は「火災の発見が遅れた」、「逃げ切れなかった」が多い割合を占めている。

出火時間帯について

- ・ 深夜帯、早朝の死者発生率、焼損床面積が高いほか、火災発生から通報までに要する時間が他の時間帯に比べ多くなっている。

火災発生から通報に要する時間について

- ・ 火災発生後、2分又は3分以内に通報できた火災の死者発生割合が最も少なくなっており、火災発生から通報までに要する時間が長くなるにつれ、死者発生割合も多くなる傾向にある。

死者数低減方策

- ・ 高齢者等でも容易な**通報方策**

- ・ 火災の**早期検知方策**
- ・ 居住者への有効な**報知方策**

- ・ 深夜帯・早朝における有効な**報知方策**
- ・ 消防隊への迅速な**通報方策**

- ・ 火災の**早期検知方策**
- ・ 消防隊への迅速な**通報方策**